

中国古典文学大系 31

平凡社

西遊記 上

太田辰夫・鳥居久靖 訳

訳者紹介

おおた ちかつお
太田辰夫 1916年東京生。東京外国語学校専修科卒。
現職 神戸外国語大学教授。文学博士。専攻 中国語
学。主著『中国語歴史文法』(江南)『現代中日辞典』
(共著・光生館)『古典中国語文法』(大安)『海上花列
伝』(平凡社)『平妖伝』(平凡社)

とりい ひさやす
鳥居久靖 1911年愛知県生。1973年没。立命館大学
文学部卒。専攻 中国語・中国文学。主著訳書『華語
助動詞の研究』(養徳社)『三侠五義』(平凡社)『水滸
後伝』(平凡社「東洋文庫」)

中国古典文学大系 全60巻

西遊記(上)

第31巻

1971年10月20日 初版第1刷発行
1984年12月15日 初版第16刷発行

訳者 太田辰夫
鳥居久靖
東京都千代田区三番町5番地
発行者 下中邦彦

郵便番号 102
発行所 東京都千代田区 株式会社 平凡社
三番町5番地
振替・東京8-29639

不良本のお取換えは直接読者サービス係まで 印刷 東洋印刷株式会社
お送り下さい(送料は小社で負担します)。 製本 株式会社 石津製本所
定価は外箱に表示してあります。

© 株式会社 平凡社 1971 Printed in Japan

西遊記へ上↓主要人名表

凡 例

三蔵たち一行を初めにおき、その他の人物（神仙妖怪をふくむ）は五十首順に、そのあとに配列した。

回の題目や詩・詞の中で三蔵たちを表わす特殊な用語は（ ）に入れて各人のあとに示した。

特定の回に集中して現われる人物には、その回数を漢数字にして付記した。

三蔵 前生は釈迦如来の第二の弟子・金蟬し。生まれ変わって陳光蕊の子、母は殷温嬌。生まれてすぐ江に流されたので江流ともいわれ、法諱は玄奘。唐の太宗のため取経に応じたことから御弟聖僧と呼ばれ、また唐僧ともいう。(嬰児・赤子・元神・禪・禪主)

悟空 東勝神州傲来国花果山頂の仙石から生まれた猿、水簾洞に住む。姓は孫。また孫行者・善猴王ともいう。天宮の御馬監の執事に任ぜられ弼馬温という官を賜わる。みづから齊天大聖と号し、牛魔王ら七人と義兄弟となる。のち、三蔵の一の弟子となり、取経に功績をたてる。(心猿・心君・心主・心神・金・金公・火)

八戒 前世は天河の天蓬元帥。豚に生まれ変わり福陵山雲栈洞に住む。観音より姓を猪、法名を悟能と賜わる。三蔵の二の弟子。(木・木母・木竜・水)

悟浄 もと靈霄殿の捲簾大将。罪あって流沙河に流されていたところ、観音より姓を沙、法名を悟浄と賜わる。三蔵の三の弟子。また沙和尚ともよぶ。(刀圭・二土・土母・土・黄婆)

白馬 前世は西海竜王敖閔の子。竜馬ともいう。三蔵を乗せて天竺まで行く。

殷温嬌 宰相・殷開山の娘。状元・陳光蕊と結婚、三蔵の母。九鳥鶏国王 道士に化けた文殊菩薩の獅子のため、井戸に落とされ、悟空たちのおかげで三年後に蘇生する。三七―四〇

烏巢禪師 樹上に巢をかけて住む。三蔵に心経を授ける。一九

惠岸行者 観音の高弟。もと季天王の第二子・木叉。観音 詳しくは観世音菩薩、単に菩薩ともいう。南海普陀落伽山(普陀巖)に住む。楊柳と淨瓶をたすさえ、しばしば三蔵たちを救う。

牛魔王 悟空たち七人の義兄弟中の長兄。妻は羅刹女、子は紅孩児。のち妻を捨て玉面公主のところへいりびたりになっている。

玉帝 玉皇上帝・玉皇ともいう最高の神。金闕雲宮の靈霄殿に住む。金角・銀角 平頂山蓮花洞に住む妖怪の兄弟。もと太上老君の炉の番人。三二―三三五

紅孩児 枯松瀾火雲洞の妖怪。号は聖嬰大王。牛魔王の子、羅刹女はその母。捕えられて観音の善財童子となる。四〇―四三

高太公 烏斯蔵国高老荘の本来の当主。三女の翠蘭にとつた婿が、実は猪八戒。悟空に頼んで退治してもらう。一八一―一九

黄風大王 八百里黄風嶺の怪。もとは靈山のふもとに住む鼠。二〇―二二

黄袍怪 碗子山波月荘の怪。宝象国王の三女・百花羞を妻としている。もと二十八宿の星宿・奎木狼。二八一―三一

黒大王 黒風山黒風洞に住む黒熊の怪。観音に捕えられて落伽山の裏山の見回り役・守山神となる。一六一―一七

黒水河神 黒水河の守り神であったが、涇河竜王の子・鼉鼉のため追われる。四三

虎力大仙 道士に化けた虎の精。鹿力大仙・羊力大仙とともに車遅国王をまどわす。四四―四六

地藏菩薩 地藏王ともいい、幽冥界の教主。翠雲宮に住む。四天神 張道陵・葛仙翁・許旌陽・丘弘濟の四人。玉帝の配下。釈迦如来 靈山雷音寺にあって取経の一行を待つ。配下に入菩薩・四車遲国王 道士に化けた虎力大仙らにまどわされ僧を虐待する。四四―四六

十殿冥王 冥府の王たち。すなわち秦広王・楚江王・宋帝王・忤官

王・閻羅王・平等王・泰山王・都市王・卞城王・転輪王の十王。

二郎真君 顕聖二郎真君・二郎顕聖などともいう。玉帝の妹が楊君の妻となつてできた子。灌江口に住む。梅山六兄弟とあわせ七聖兄弟とも称する。

真武君 初め天界の北天門にいたが、後に、武当山大和宮に住む。蕩魔天尊・蕩魔祖師ともいう。

太上老君 老子のこと、道教の三神のひとつ。離恨天兜率宮に住む。太宗 唐朝創業の帝・李世民。また唐王ともいう。観音の教示により、大乘の経を求めべく、そのことを三蔵にゆだねる。

太白長庚星 太白金星ともいう。幼名は李長庚。しばしば悟空に危難を教える。

陳光蓋 三蔵の父。赴任の途中、水賊劉洪に殺される。九鎮元子 鎮元大仙ともいい、万寿山五莊觀に住む仙人。觀の人參果樹を悟空たちが根絶やしにしたためおこつて争うが、最後に和睦する。

二四一―二六 陳清・陳澄 通天河の東岸・陳家荘に住む兄弟。清の娘の一斤金と澄のむすこ陳関保が靈感大王のいけにえになるところを、悟空らのため救われる。四七―四九

通天河の老いがめ 靈感大王（水怪）を退治してもらつた恩に感じ、一行を背に乗せて通天河を渡す。四九（九九）

寅將軍 双叉嶺に住む虎の精。特処士（野牛の精）・熊山君（熊の精）と仲間である。一三

哪吒三太子 哪吒太子ともいい、李天王の第三子。武勇にすぐれる。白骨夫人 白骨嶺の怪。三蔵を食うべく三度姿を変じて現われ、悟空のため退治される。悟空はこのことのため三蔵に追放される。二七

宝象国玉女 もと披香殿の香をたく玉女。宝象国王の娘に生まれ変わ

り、百花羞とよばれる。黄袍怪の妻となる。二八―三一

法明和尚 金山寺の長老。江に流された三蔵（女装）を育てる。九
羅刹女 鉄扇公主ともいい、牛魔王の妻、紅孩児の母。翠雲山芭蕉洞に住み、火焰山の猛火を消すことのできる扇をもっている。（五九
一六一）

李天王 名は靖、手のひらに塔をのせているので托塔李天王ともいう。二男は惠岸行者（木叉）、三男は哪吒三太子。

竜王 東海竜王敖廣・南海竜王敖欽・北海竜王敖順（その太子は摩昂）
西海竜王敖閻（その子は白馬となる）の四兄弟のほかに、妹の夫で

ある涇河の竜王（その子は黒水河に住む鼉潔）がある。

劉全 均州の財産家。妻の李翠蓮が自殺したことから、冥府に瓜を届ける。一一―一二

劉伯欽 双叉嶺の狼師。鎮山太保ともいう。一三
靈吉菩薩 小須弥山に禅院をかまえて経を講ずる。

靈感大王 通天河の水怪。観音が飼っていた金魚が逃げて精となったもの。観音の魚籃に生けどりになる。四七―四九

黎山老母 寡婦の賈氏に化け、三人の娘（実は観音・普賢・文殊）とともに三蔵ら一行の禅心を試みる。二三

目

次

第一回 三

靈根 育はぐくまれて源流出で
心性 修しゆ持ぢりて大道生なず

第二回 三

菩提真妙の理を悟徹し
魔を断じ本に帰し元神に合す

第三回 三

四海の千山 皆みな拱あきしく服し
九幽の十類 尽ことごとく名なを除く

第四回 三

官 弼ひつぱ馬ばに封ふうぜらるるも心こころなんぞ足たらん
名 齊せい天てんと注しゆせらるるも意い未みだ事ことからず

第五回 三

蟠ばん桃たうを乱みだして大聖 丹にをぬみ
天宮てんぐうに反かへきて諸神 怪あやを捉とらう

第六回 三

觀音 会あひに赴おもむいて原因げんいんを問とい
小聖 威いを施ほして大聖だいせいを降くだす

第七回 五

八卦はつぱ炉ろ中ちゆうより大聖だいせいを逃のがし
五行ごうぎやう山下さんかに心猿しんえんを定さだむ

第八回 六

我が仏 經きやうを造つくりて極楽ごくらくを伝つたえ
觀音 旨しめを奉ほうじて長安ちやんあんに上ある

第九回 七

陳光蓋ちんこうがい 任にんに赴おもむいて災わざいに会あい
江流かうりゆうの僧そう 響きやうを復たがして本ほんに報むかす

第十回 八

老龍王らうりゆうわう 計けい拙せつく天てんの条じょうを犯かし
魏丞相ゑいじやうさう 書しよを遣つかりて冥吏めいしに托たくす

第十一回 七

地府に遊んで太宗 魂たましいを還り
瓜果を進めて劉全 配を統ぐ

第十二回 一〇六

玄奘 誠まことを乗りて大会を修し
観音 像しづなを顕あわして金蟬を化す

第十三回 二二九

虎穴に陥って金星 厄やくを解い
双叉嶺に伯欽 僧を留む

第十四回 二二六

心猿 正に帰して
六賊 踪あとなし

第十五回 二二六

蛇盤山だばんざんに諸神暗あやみに佑け
鷹愁澗たかしみづに意馬鞭いばむちを収む

第十六回 二四四

観音院の僧 寶貝たからを謀り
黒風山の怪 袈裟けあさを竊ぬすむ

第十七回 二五五

孫行者 大いに黒風山くろかぜのやまを鬧さわがし
觀世音 熊羆くまびの怪おそろを収と伏くぐ

第十八回 二六三

観音院にて唐僧 難むづかしを脱だれ
高老荘にて行者 魔まを降す

第十九回 二六六

雲棧洞にて悟空 八戒はつがいを収め
浮屠山にて玄奘 心経しんきやうを受く

第二十回 二七七

黄風嶺にて 唐僧難あり
半山の中 八戒はつがい先を争う

第二十一回 二八四

護法 莊むすを設けて大聖だいせいを留め
須弥の靈吉 風魔ふうまを定む

第二十二回 二九二

八戒 大いに流沙河りゅうさかに戦い
木叉ぼくし 法ほふを奉たてじて悟淨ごじやうを収む

第二十三回 三〇〇

三蔵 本ほんを忘れず
四聖 禅心ぜんしんを試む

第二十四回 三三三

万寿山まんじゆうざんに大仙だいせん故友こゆうを留め
五莊觀ごしやうくわんに行者ぎやうじや人參じんじんを竊ぬすむ

第二十五回……………三九

鎮元仙 赶いて取経の僧を捉え
孫行者 大いに五莊觀を鬧がす

第二十六回……………三六

孫悟空 三島にて方を求め
觀世音 甘泉もて樹を活かす

第二十七回……………三五

屍魔 三たび唐三蔵に戯れ
聖僧 恨んで美猴王を逐う

第二十八回……………三四

花果山に群妖 義に聚まり
黒松林に三蔵 魔に逢う

第二十九回……………二四八

難を脱して江流 国土に來たり
恩を承けて八戒 山林に転す

第三十回……………二五五

邪魔 正法を侵し
意馬 心猿を憶う

第三十一回……………二六五

猪八戒 義もて猴王を激し
孫行者 智もて妖怪を降す

第三十二回……………二七

平頂山に功曹 信を伝え
蓮花洞に木母 災いに逢う

第三十三回……………二八

外道 真性に迷い
元神 本心を助く

第三十四回……………二九〇

魔頭の巧算 心猿を困しめ
大聖 騰那て寶貝を騙る

第三十五回……………二九六

外道 威を施して正性を欺き
心猿 宝を獲て邪魔を伏す

第三十六回……………三〇五

心猿正しく処して諸縁伏し
傍門を劈破りて月明を見る

第三十七回……………三一二

鬼王 夜唐三蔵に謁し
悟空 神化して嬰兒を引う

第三十八回……………三二三

嬰兒 母に問いて邪心を知り
金木 玄に参じて仮真を見る

第三十九回……………三三一

一粒の金丹を天上に得
三年の故主世間に生く

第四十回……………三三六

嬰兒戲化いて禅心乱れ
猿馬・刀圭・木母むなし

第四十一回……………三四八

心猿 火に遭いて敗れ
木母 魔の擒となる

第四十二回……………三五六

大聖 慇懃に南海を拜し
観音 慈善にして紅孩を縛す

第四十三回……………三六五

黒河の妖孽 僧を擒えて去り
西洋の竜子 鼉を捉えて回る

第四十四回……………三七三

法身の元運 車力に逢い
心正の妖邪 脊関を度る

第四十五回……………三八三

三清觀に大聖 名を留め
車遲國に猴王 法を顕わす

第四十六回……………三九三

外道 強きを弄して正法を欺き
心猿 聖を顕わして諸の邪を滅ぼす

第四十七回……………四〇三

聖僧 夜 通天水に阻まれ
金木 慈を垂れ小童を救う

第四十八回……………四一三

魔は寒風を弄んで 大雪 飄り
僧は仏を拜まんと思いて 層氷を履む

第四十九回……………四二二

三蔵 災いありて水宅に沈み
観音 難を救い魚籃を現す

解 説……………四三二

太田辰夫……………四三二

西さい

遊ゆう

記き

上

鳥とり 太た

居い 田た

久ひさ 辰た

靖やす 夫お

訳

第一回 靈根 育孕まれて源流出で
心性 修持りて大道生ず

詩に曰わく、

混沌未だ分かれずして天地乱り

茫々渺々として人の見る無し

盤古の鴻濛を破りしより

開闢して茲從り清濁辨る

群生を覆い載せて至仁と仰がれ

万物を發明して皆善と成す

造化会元の功を知らんと欲せば

須らく看よ西遊釈厄伝

さても天地の数は、十二万九千六百年を一元とする。その一元を十二会に分けるが、それが子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二支、一会はつまり一万八百年にあたるわけだ。

いま、これを一日に見立てるならば、子の刻には、陽の気がただよい始め、丑の刻になると鶏が鳴く。寅の刻ではまだ薄暗いが、卯の刻には日が出る。朝飯を終れば辰の刻、巳の刻ともなれば日は次第に上り、午の刻には空のまん中に来る。未になると西に傾き、申にはたそがれ、酉で日は西に落ちる。戌でとつぷり暮れて、亥の刻には人々も寝しすまろうという次第。

これを天地の運数にたとえるならば、戌の会の終わりで、天地は薄暗がりて万物は閉塞している。それから五千四百年をへた亥の会の初めではまっ暗で、天地間には人も物も存在しない。だから混沌というのである。さらに五千四百年、亥の会が終わろうとするころは、貞下りて元起り、子の会が近づいたが、また次第に明るくなる。邵康節の曰わく、「冬至は子の半、天心に改移なし、一陽初めて動くところ、万物未だ生ぜざるの時」と。この時になって天は、初めて根元をもつのである。さらに五千四百年、ちょうど子の会になると、軽くて清らかなものは上に上って、日となり、月となり、星辰となつた——日月星辰を四象という。天は子に開けたというのはこのためである。そしてまた五千四百年、子の会が終わりにかけて丑の会に近づくと、次第に堅く中味も詰まってくる。「易経」に、

大いなるかな乾元、至れるかな坤元、万物資りて生ず、乃ち順いて天を承く。

といているが、ここで地が初めて固まるのである。また五千四百年、ちょうど丑の会になると、重くて濁ったものが下によどんで、水となり、火となり、山となり、石となり、土となつた——この水火山石土を五形という。だから地は丑に開けたというのである。またも五千四百年を経て、丑の会が終わりに亥の会の初めになると、万物が発生する。曆書に、天の気は下降し地の気は上昇して天地交合し群物みな生ず、といている。ここで天は清らかに、地はさわやかに、陰陽相交わるのである。さらに五千四百年、ちょうど寅の会になると、人間が生まれ、獣が生まれ、鳥が生まれる——これを天地人三才の位が定まったという。人は寅に生まれるというのもこのためである。

こうして盤古が世を開き、三皇が世を治め、五帝が倫を定めたことから、世界は四つの大陸に分かれた。曰わく、東勝神州・西生貨州・

南瞻部州・北俱盧州。この書物の物語は、もっぱら東勝神州のことである。

東勝神州の海のかなたに傲来という国があつて、近くに大海をひかえていた。その海中にひとつの名山があり、花果山と呼ばれたが、この山こそは十州の祖脈、三島の主峰であつた。

そのいただきに、ひとつの仙石があつた。高さは三丈六尺五寸あつて、天周の三百六十五度に準じ、回りは二丈四尺、曆の二十四氣になぞらえ、岩上の九竅八孔は、九宮八卦にかたどつたものであつた。

天地開けてこの方、石は、夜ごと日ごと、天地の精華と、日月の精華とに潤つていたが、長い年月がたつにつれ、やがて靈氣をはらんで、内に仙胎を宿した。

ある日のこと、この石が裂け割れて、まりほどの石の卵が生まれ、卵はまた風にさらされて、一匹の石猿がかえつた。石猿は、五官ごとごとく備わり、手足も満足。さっそく、はうこと歩くことを覚え、四方を拝したものである。すると、その目からふたすじの金色の光がほとばしつて天界にまで達し、高天上聖玉帝(天帝)を驚かせた。玉帝は雲居なる靈霄殿に出御あつて仙卿の参集をもとめ、キラキラと光る金色の光をながめると、千里眼と順風耳の二將を召し、南天門を開いて様子をおがうよう、命じた。ほどもなく二將

「金色の光の出場所は、東勝神州は傲来国花果山にございます。その山上に、一塊の仙石がございまして、それが卵を生みましたが、風にさらされて石猿がかえりました。かの石猿、そこで四方を拝しましたところ、その目から金光を發して天界を射たのでございます。目下、水を飲み食餌を服しておりますゆえ、やがて金光も消えうせるでございましょう」

と復命すれば、玉帝、

「下界のものは、天地の精華より生まれるもの。異とするには当たるまい」

と、仁慈のおことば。

かの猿は山中にあつて、走り回る、はね回る。草木をかじり、谷間の泉にのどを潤し、花を手折り、木の実をあさるかたわら、猿鶴を友とし、麋鹿の群れに投じて、夜は石がけの下に眠り、あしたは峰の洞に避んだ。まことにそれは、山中に甲子なし、寒さ尽くれども年を知らず、というありさまであつた。

ある、焼けつくような暑い朝のこと。

石猿は、大勢の猿といっしょに、松の木陰で涼んでいたが、そこでひと遊びすると、谷川へ水浴に行った。ほとばしり流れる谷川の水は、まことにこんこんとして尽きるところを知らぬありさま。猿たちは言つた。

「この水は、いったい、どこから流れて来るんだらう。おれたち、きょうはすることもないから、ひとつ、谷川をさかのぼって、水源を探りに行こうじゃないか」

そこで、わつと喊声をあげ、いっせいに駆け出して、流れに沿って山をよじ登り、まっしぐらに源にやってくる。そこにはひとすじの滝がかかっている。かれらは手を打って感嘆し、

「すてきだ、すてきだ! 誰かあの中へ飛び込んで、源を見つけ出し、けがひとつせず出て来る者があつたら、おれたちの王様にするんだがなあ」

こう三度続けさまに呼ぶと、突如、群がる猿の中から、かの石猿が飛び出し、大声で叫んだ。

「おれがやる、おれがやる!」

けなげや石猿、目を閉じて身をかがめたかとおもうと、ぱつと滝壺



水簾洞の前で戯れる猿たち

に飛び込んで行った。

ふと目をあげ、頭をあげて見ると、そこには水も波もなく、鉄板の橋が、くつきりと掛かっている。橋の下を流れる水は、石の穴を貫きほとばしって、さか落としに滝となつて、橋の入口をふさいでいるのだ。また橋からながめると、どうやら人のすみかのように、まことにかっこうな場所。見とれることしばし、橋を飛び越してあたりを見ると、中央にひとつの石ぶみがあり、それには、

花果山福地 水簾洞天

と刻んである。石猿は、むしろうれしくなり、再び目をつむり身をかがめて水の外へ飛び出すと、はっはっはつと笑つて、

「しめたぞ、しめたぞ！」

猿たちは、かれを取り巻いて尋ねた。

「中はどんなだった？ 水はどれくらい深いんだ？」
 「水なんかあるもんか。あそこにはひとつの鉄板の橋が掛かっている、その向こうは天然自然のお屋敷なんだ」

「どうしてお屋敷ってことがわかる？」

石猿はにこにこして、

「この水はね、その橋の下の石の穴からほとばしり、さか落としに滝となつて、橋の入口をふさいでいるのさ。橋のあたりには、花もあれば木もあつて、そこは石室。室の中には、どれも石造りの鍋・かまど・碗・石ばち・寝台・腰掛がちゃんとある。中ほどにはひとつの石ぶみが立っていてね、それには花果山福地水簾洞天とほつてあるんだ。まったくもつておれたちの好い隠れ場所というもんさ。さあ、みんなで行つて住もうや。そこなら雨風に苦しめられることはないぞ」

聞いて猿どもは、みなみな大喜び、口をそろえて、

「そんならおまえ先に立つて、おれたちを案内してくれ」

と言う。石猿は、また目をつむり、身をかがめて、ヤツと中にひと飛び、猿たちも、続いて飛び込んで行く。

橋を飛び越えるが早いのか、かれらははてんで、はちをひつたくる、お碗を奪いあう、かまどを占領する、寝台を取り合う。あちへ運び、こちへ移し、まことにいたずらな猿の根性まる出しで、いっときもじつとしてはいない。へとへとに疲れたあけく、やっと静かになった。

石猿は、上座について言った。

「諸君！ 信義を欠く人間にとりえはないというぞ。諸君はさつき、滝へ飛び込み、飛び出して、けがひとつせぬほどの腕のある者があれば、王様にしよつたろう。おれは今この洞穴を見つげ出し、諸君が、枕を高くして眠り、一族そ

ろつて暮らせるしあわせを与えてやったのに、どうしておれを王様にしようとするのだ？」

猿たちは、そう言われると、うやうやしく石猿を拝して、口々に千歳大王と称えた。かくして石猿は王の位につき、石の字を削つて美猴王と名のつた。その証契として次の詩、

三陽交泰して群生を産み

仙石は胞はらに含む日月の精

卵を借り猿と化して大道を究うし

他の名姓を仮り丹を配して成る

内 不識を觀ずるは無相に因り

外 明知に合して有形と作る

歴代の人々皆此れに属し

王と称し聖と称して縦横に任う

美猴王は、ひと群れの猿猴・獼猴・馬猴などを率い、君臣の序を定め、内外の官を分かち、朝には花果山に遊び、夕べには水簾洞に眠つて、鳥仲間にもくみせず、獸の類にも従わず、ひとり、王としてあるがままの生を樂しむこと二、三百年あまり――。

一日、かれは猿たちを集めて酒盛りを開いていたが、突然はらはらと落涙した。猿たちは、驚きあわてて、回りに手をつかえ、

「大王には何をこ心痛なされますか？」

美猴王、

「わしはこうやって楽しんでる最中にも、ちと、先のことか気がかかって悲しくなるのだ」

猿たちは笑つて、

「大王さま、わたしどもは、毎日このように仙山福地、古洞神州に住まい、気づい気ままのしたい放題、この上のしあわせはありませぬ。大王には何をよくよなさる？」

「今日でこそ、人間の王の作ったおきてにも従わず、ほかの禽獸の威勢にもびくともしないが、やがて年をとり血氣も衰えてくると、いつの間にか閻魔のやつが見張っている。死んだが最後、この世界に生まれて来たというだけのこと、末ながく天人の籍に名をとどめることはできぬではないか」

それを聞くと猿どもは、それぞれ顔をおおつて泣き悲しみ、一同この世の無常をかこちあつた。

と、居並ぶ猿の中から、一匹の腕長猿（注）が飛び出し、声をはりあげて言うには、

「大王さまが、そのように先々のことをご案じになるのは、それこそ世にいう道心とやらがきざしたというもの。ところで、この世で五種類の生き物のうち、閻魔王でもどうにもならぬものが、三つございます。すなわち仏と仙と神聖の三者で、輪廻（注）を超越し、不生、不滅、天地とよわいを同じゅうするのです」

「その三者は、いったいどこにいるのだ」

「閻浮世界の古洞仙山に住まっております」

聞くより美猴王、大いに喜び、

「よし、おれはあした、お前たちに別れて山を下り、海のくま、天の果てまで、足にまかせて漫遊し、かならず、その三者を尋ね出そう。そして不老長生の法を学びとり、閻魔の災いを免れよう」

ああ、この一言がきっかけで、たちまち輪廻の網から飛び出し、ついに齊天大聖とはなったのである。

猿たちは手を打つてほめそやし、

「めでたい、めでたい。てまえども、あしたは、山をよじ嶺を越えて、果実を捜し求め、大宴会を開いて大王をお送りいたしますしょう」

翌日、かれらは果たして仙桃を取り、異果を摘み、山いもを掘り、ささゆりを切つて来て、石の食卓、石の腰掛をきちんと配置し、酒さかなを並べたところ、美猴王を上座にすえ、かわるがわる、酒をつぎ、果物を勧めつつ、一日を心ゆくまで飲み暮らしたのであった。あくる日、美猴王は早くから起き出し、枯松を折つていかだを組み、竹の棒でさおを作つた。そしてただひかりに乗り込み、力にまかせてつづれば、飄々蕩々、大海の波まに向かつてまっしぐら、風に乗つて南瞻部州へとやつて来た。

この旅は、かれにとつては幸運だった。いかだを出してからというもの、連日、東南の風が強く、かれを西北の岸辺へと吹き送つたのだつたが、それが南瞻部州の境域だったのである。

美猴王は、いかだを捨てて陸に飛び上がった。海岸では、人々が魚を取り、雁を打ち、はまぐりを掘り、塩をすくつてゐる。かれは、このこ近づくと、おどけたかっこうよろしく、

「お化けだぞお！」

人々は肝をつぶし、びくや網をほうり出し、くもの子を散らすように逃げ走つた。よたよたしているひとりをつかまえ、着物をはぎ取つて、見様見まねで身にまとうと、したり顔でぶらりぶらりと、諸国をめぐり歩く。行くみちみち、町なかに来ると、人間の作法やことばを覚えた。

旅を重ねてひたすらに仙仏神聖の道を尋ね、不老長寿の法を求めたのであったが、世間の人間といえ、どれもこれも名利を追うやからばかり、生命のことも顧みる者としてはさらさない。これこそ、

いつになつても名利の取り合い
早起きおそ寝でゆとりなし
ろばに乗れば駿馬がほしく

大臣になれば王侯を望む

着ること食うことにただあくせく

閻魔の呼び出し何のその

願うは子孫の富貴ばかり

自分のいのちはそっちのけ

美猴王は仙道を求めつづけたが、よき師にめぐり合はぬ。かくていつしか八、九年がたつたころおい、はしなくも西洋大海の岸辺にたどりつた。かれは、この海に向こうにこそ、神仙がいるに違いない、と考えた。そこで前のようにいかだを組み、ただひとり、西海に浮かんで、まっすぐに西牛貨州にやつて来た。

陸が上がつて、ながらく遍歴を続けたある日、とつぜん、目の前に一座の高山が秀麗な姿を見た。ふもとのあたりは、深々と茂つてゐる。野獣の出没ものかわ、まっしぐらに頂上の上つてながめてゐると、ふと森の奥で人声がする。急いで中にわけ入つて、じつと耳をすませば、それは歌の声。

棋を観るまに柯爛るも、木を伐ること丁々。雲の辺谷口を徐に
行きて、薪を売つて酒を沽い、狂笑いしてみずから情を洩ます。
蒼き逕に秋高く、月に対して松の根を枕とし、一覚れば天は明け
たり。旧き林を認め、崖を登り嶺を過り、斧を持ちて枯藤を断つ。
収め来たつて一担と成し、市上を歌いつつ行きて、米三升と易う。
さらにいささかも争競ことなく、時価は平々。機謀巧算を会せず、